

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Mutual Support: Old and New Generations in Dombey & Son and Urania Cottage

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小西, 千鶴, KONISHI, Chitsuru メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1906

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



新旧の遭遇 — *Dombey and Son* とウラニア慈善

小西 千鶴

序

チャールズ・ディケンズ（Charles Dickens）は、売春婦の更生施設であるウラニア・コテージ（Urania Cottage）の創設と同じ時期に、*Dombey and Son*（1846-48）の執筆、連載を開始した。翌月の1846年6月には、John Forsterに‘I think the general idea of Dombey is interesting and new and has great material in it.’（Foster 462）と語り、彼がこの作品に新しい可能性を見ていたことが示されている。‘Hungry Forties’ と呼ばれる減退の時代を描くこの作品は、後に彼の作家人生の分岐点と評され、作家の精神と時代背景のつながり、帝国主義についての見解、そしてジェンダーとキャピタリズムの関連性など多様な観点から論じられてきた。¹ もちろんこの作品には、40年代の鉄道投機熱を揶揄するスタッグズ・ガーデンのように、当時の社会的現実の写実的な描写もある。しかし、それ以上にディケンズが本作品で注視するのは、当時のイギリス社会が過去の時代からひきついだ古い体質である。たとえば1834年の新救貧院法によって非人道的な施設と化した救貧院の実体（*Oliver Twist*）や、日常的に私生児が虐待され社会問題となっていたヨークシャーの寄宿学校（*Nicholas Nickleby*）などのように、当時の法律やシステムを直接批判するのではなく、40年代という変革期に書かれた *Dombey and Son* において、ディケンズは、むしろ過去から引き継いできた慣習や伝統といった社会の根源をなす問題に視野を広げた。そして、その視点の変化が、ディケンズを創作上の転機へと導いたのである。

さらに重要なのが、この人生の大きな転機に、ディケンズが手がけたウラニア慈善との関連である。刑務所を出所した売春婦たちを収容して、その社会復帰を図るための保護施設であるウラニアが、ディケンズ小説に与えた影響については、すでに多くの批評家が論じている。² しかし、この保護施設創設の発

1 例えば Chesterton 130, Perera 59-77を参照。

2 例えば、Slater は、堕ちた女性の贖罪における変化を指摘し(345-47)、Winnifurth は、より現実味を帯びた女性の人物造形に着眼する(95)。Pope においては、作家の移住における肯定的な態度の変化を指摘している(186-187)。ウラニアに入所した女性についての詳細は Janes, Hartley, Takei, を参照。

案者で事業の資金提供者であるアンジェラ・バーデット＝クーツ（Angela Burdett-Coutts）との対立がディケンズに与えた影響については、ほとんど論じられていない。当時ロンドンで最も有力な銀行のひとつであったクーツ銀行（Coutts & Co）の後継者で、Sir Frances Burdett（5th Baronet）を父に持つ歴代領主の家柄のクーツは、この施設作りにおいても、古い慣習を重視した。それに対して父親が破産して債務者監獄に入れられ、労働者の少年に混じって靴墨工場でラベル貼りの仕事に従事する貧しい幼少時代を経た後に、小説家として成功して財を築いたディケンズは、現実的な対応を主眼とする施設作りを目指した。両者をそれぞれ、単なる生まれの違いによる新旧の価値観の体现者と見ることも可能だが、一方で男性の権威が支配的な時代に、ディケンズはこのウラニア創設の過程で、事業の決定権を女性であるクーツに委ねざるを得ないという、思いもかけない新たな立場におかれることになった。つまり、ジェンダーに関する点では、クーツの方が新たな価値を体现する存在だったことになる。一般に男性の所有物と認識されがちな女性の立場を、³ 類まれな財力によって逆転したクーツは、おそらく、夜の通りに溢れかえる売春婦以上に大きなインパクトをディケンズに与えたはずだ。

物語は、ロンドンのシティにその名を轟かすドンビー父子商会の永続を望む、伝統的な家長ドンビー（Dombey）と、その専制的な父親から女性ゆえに無価値な存在と拒絶されながら、ひたすら父を思う娘フローレンス（Florence）との父娘関係を中心に、商会と家庭という2つの「家 home/house」の構築をテーマに展開する。次世代へのバトンタッチはどうなるのか。未来を託す相手は、女性でもいいのか。旧式な価値観の蔓延る英国の商会と家庭を舞台に、新旧の世代交代を主題とするこの作品には、ウラニアという売春婦のための Home づくりと、事業の決定権を握る女相続人クーツとの葛藤を通して、家父長中心の社会を見直し、女性をも含めた Home としての国家の構築に思い至った、作家の意識の発展を読みとることができる。小論では、旧世代と新世代の交差に焦点をあて、新時代の到来を期待させる女性像を中心に、作家の社会意識を考察したい。

3 女性は、男性の所有するものを次の血族につなぐパイプ役として、相続における法律の観点から所有物とみなされた。父親は娘が結婚前に誘惑された場合、また夫は妻の不貞行為に対し、それぞれの加害者を訴えることができた。これは、所有地の不法侵入と同扱いで、自身の所有物である娘、妻の体への不法侵入とされた。The Marriage Act of 1697では、妻の不貞行為により「跡継ぎ」が危険にさらされた場合にのみ、上流階級には離婚が認められた。中産階級に認められた The Matrimonial Causes Act of 1857でも同原則が適用された。また、父もしくは夫が、娘、妻を暴力の危険に晒しても法的な罰則を受けることはなかった。このような父権の絶対性を、18世紀の法学者 William Blackstone は、‘the empire of the father’、女性側を ‘entitled to no power’ (453) と述べた。

1. 危うい旧世代 - absolutely masculine system

Dombey and Son の冒頭は跡取り息子の誕生を見守る父ドンビーの描写で始まる。息子はこの世に誕生して「48分」、父ドンビーの年齢は「48歳」(11)とするユーモアもさることながら、親子のつながりが数字にのみ還元される情の欠けた家庭のあり方が、ここで印象づけられる。小説冒頭から読者は、既に主人公の人生が半世紀近く経過した時点に立たされていることになる。そして、ドンビーという人間を形成してきた、物語では決して語られることのないこの半世紀に亘る時間こそが、待ちわびた跡継ぎ息子に対するドンビーの何ともぎこちない態度の根源にある。カムデン・タウンにおける鉄道敷設や鉄道投機の描写が明らかにするように、1840年代のイギリスを舞台とする *Dombey and Son* において、物語の冒頭で48歳と紹介されるドンビーは、ジョージ三世から四世、ウィリアム四世を経て、1837年のヴィクトリア朝へと、イギリスが大きな変化を経験した時代を生きてきたことになる。とりわけジョージ王朝からヴィクトリア朝への移行は、様々な社会変革に加え、王から女王へという君主のジェンダーの転換もあった。

女王が君臨するヴィクトリア朝とは異なり、ジョージ王朝は基本的に男性的な世界だった。たとえば、ジョージ王朝を象徴する出来事のひとつに、フランスとの戦争(1793-1815)がある。愛国心が叫ばれ anti-French を合言葉に軍の増強が図られた。さらに、摂政皇太子の時代になると、贅沢な生活様式が話題となり、彼がブライトンに建設した Royal Pavilion の煌びやかさは、拝金主義の風潮をにわかに社会に漂わせたという。⁴

鉄道の敷設といういわゆる40年代に特有の社会現象を描きながらも、この戦争と金銭が支配する摂政皇太子時代の男性的な社会の名残りを *Dombey and Son* は描いている。とりわけ、ドンビー商会の長ドンビーは、‘the house had been inhabited for years by his father, and in many of its appointments was old-fashioned’ (35) と描かれて、母親不在の旧式な家長としてのあり方が強調される。そのことは、彼が常に愛国心の象徴ともいえる軍と同色の高価な青いコートに身を包み、‘jingled and jingled the heavy gold watch-chain’ (11) とその財力を表す金鎖の音を轟かすことから明らかだ。このドンビーの姿は、支配階級を主なメンバーとする排他的クラブ The Sublime Society of Beef Steaks を思わせる。そこでは、Regency gentleman の愛国心と anti-French の表象に Beef を掲げ、集会では青いコートとベストの着用を義務付け、国家意識の称揚を図っ

4 George IV は、政治には興味を示さず、数々の優れた芸術品のコレクターであり建築家やデザイナーのパトロンであった。常に、高級品や「楽」を追求し善しとする彼の生活様式は、特に厳粛なキリスト教徒から忌み嫌われたという (Plumb 158-78)。

た。⁵ カトル船長 (Captain Cuttle) もまた青のユニフォームを着用し、バグストック少佐 (Major Bagstock) の顔色も愛国心と保守派の象徴である青が強調される。

しかも、‘The earth was made for Dombey and Son to trade in’ (12) と描かれるように、ドンビーは商会の利益を何よりも重視し、貧民を忌み嫌って、乳母として雇ったポリー (Polly Toodle) を家族から引き離れたうえに男性的な名前リチャーズ (Richards) に呼び変えてしまう。妻ファニー (Fanny) は、ドンビーには絶対服従で、男の子を産むことを生きがいにしなげなければならない、6歳の娘は ‘a Bad boy’ (13) と同じ無価値の存在でしかない。ここでは女性的なものは影を潜め、ヴィクトリア朝の理想とされた温かい家庭は存在しない。

このドンビー家の状況は、マルクスとエンゲルスが工業化の結果として提示した人間関係を思い起こさせる。⁶ 娘のフローレンスを ‘merely a piece of base coin that couldn’t be invested’ (13) というドンビーは、いわゆる金銭的人間関係を家庭に持ち込んでいるのだが、じつはこの点に、ジョージ王朝からヴィクトリア朝に至る家庭観の大きな変容がある。というのも、先の時代とは異なり、ヴィクトリア朝ではピューリタンの自助の生き方の上に一家団欒のマイ・ホーム主義が家庭生活の理想としてひろく定着し、たとえ王であろうと家庭内では夫としての役割を果たさなければならないという考えが主流となったからである。⁷ この一家団欒の理想に与しないドンビーは、一見したところ、摂政皇太子時代の道徳的退廃とは対照的に見えながら、じつはヴィクトリア朝とは相容れない思考の持ち主といえるのではないか。

5 ジョージ四世やクーツの父 Sir Frances Burdett, 1st Duke of Wellington も会員だった。

6 「ブルジョワ階級は、どこであれ、支配をにぎるにいたったところでは、封建的で、家長的でもあれば牧歌的でもあった一切の関係を破壊した。かれらは、人間を血のつながったその長上者に結び付けていた色とりどりの封建的きずなを容赦なく切断し、人間と人間とのあいだに、赤裸々な利害以外の、つめたい現金勘定以外のどんなきずなをも残さなかった。ブルジョワ階級は、家族関係からその感傷的なヴェイルを取り去って、純粋な金銭関係に変えてしまったのである」(マルクス、エンゲルス42-43)。

7 こうした家庭像の変容を象徴的に表すのが、1820年ジョージ四世がその妻キャロライン (Caroline of Brunswick) を不貞の罪で訴えた前代未聞の王室スキャンダルである。愛情のない政略結婚の解消を意図して王が起こした裁判だったが、王自身の派手な生活ぶりに違和感を持つ教会の法廷は王の訴えを受けいれず、一年後に女王に対する訴訟は取り下げられた。しかし、女王の私生活が露呈され醜聞に晒されたのに、王は無傷という不条理が保守派と急進派の政治的対立に発展し、同時にそれは国民には道徳心の問題として浸透した。女王は9ヶ月後に53歳という若さでこの世を去るが、世論は女王に同情、ジョージ四世が夫の義務を果たし、真の英国の父になることを強く望んだという (Davidoff and Hall 150-55)。この世論は、ウィリアム四世とその妻に受けつがれ、1840年に結婚したヴィクトリア女王とアルバート公もこれを継承し、その家庭がヴィクトリア朝の理想として中産階級に大いに支持された。

労働を神聖視し、勤勉、節約、努力、忍耐を是とするピューリタンの自助の精神、いわゆる当時の中産階級の倫理観や姿勢は、家庭生活を忌み嫌ったジョージ四世を特徴付ける Regent London の煌びやかな生活様式の対極にある。40年代は、この相対する二つの価値観が、ひとつの社会の中に混在した時代だった。1735年に設立された Sublime Society of Beef Steaks についての、

In the meantime, gradual changes crept over the Society; imperceptible at first, but with each succeeding year more and more pronounced. The declining did not amalgamate with the rising generation. All the time-honoured observances - follies though they were - that had been part of a system with the Sublime Society of Beef Steaks, were gradually sought to be ignored by modern members. The blue coat and buff waistcoat were discarded; the ring, if occasionally produced, was a curiosity to be handed round as an object of art of the olden time (Arnold 33).

という記述は、当時の社会の激しい変容を指すとともに、旧体質の人々が価値観を共有しない新しい世代との遭遇によって感じた不安と不満を、如実に表したものだ。ドンビーが直面するのは、まさにこの不安なのである。

2. 主従関係と世代交代

じっさい、時代の節目に起こりがちなこの新旧の対立を、ディケンズは主従関係に見立て、*Dombey and Son* で示している。たとえば、ドンビー商会の所有者ドンビーとマネージャのカーカー (James Carker)。カーカーは外国語に精通しカードプレイヤーのようなスマートさで業務に敏腕を振るい、その姿は ‘feline from sole to crown’ (329) と描かれて、主人ドンビーの硬直したあり方とは対照的に、猫のようなしなやかさが強調される。しかも、彼の住居は ‘beautifully arranged and tastefully kept’ (513) と居心地がよい。妻を持たず、兄や妹と絶縁し、独身生活を通す身ではあるが、彼はまさに、居心地のよい家庭の構築を求め続けたヴィクトリア朝の理想の体現者とさえ見える。しかし、彼はしなやかなその生き方の裏に、じつは専制的な主人の支配をも覆す危うさを潜ませてもいるのだ。ドンビーに ‘You respect nobody, Carker,’ と問われたカーカーは、

‘No?’ inquired Carker, with another wide and most feline show of his teeth.

‘Well! Not many people, I believe. I wouldn’t answer perhaps, for more than

one.' A dangerous quality, if real; and a not less dangerous one, if feigned (196).

と描かれる。ここでもまた「猫のような (feline)」という形容が繰り返されているが、カーカーは、しなやかだが狡猾な「猫」のイメージに相応しく、言葉を発するたびに示される歯、つまり本心を隠した作り笑いが示す、人格の二面性が強調されているのだ。ドンビーが Regency の男性中心主義や拝金主義を体現するなら、カーカーはヴィクトリアニズムとそれに付随する虚栄や偽善を具現するといえる。

さらに注目すべきは、カーカーの優秀さの陰で、ドンビーの滑稽なまでの無能さが強調されていることだ。大切な客人との歓談に、ドンビーは、有能な部下カーカーを同席させる。

Mr Carker now, began to discourse upon the pictures and to select the best, and point them out to Mr Dombey: speaking with his usual familiar recognition of Mr Dombey's greatness, and rendering homage by adjusting his eye-glass for him, or finding out the right place in his catalogue, or holding his stick, or the like (426).

ドンビーに対するカーカーの細やかな配慮は、女性的な要素を彼が持つことをうかがわせる。再婚した妻のイーディス (Edith) を支配することが出来ないドンビーが、カーカーを妻との仲介役に任命するように、ドンビーの威厳や虚栄心を守るために、彼の存在はなくてはならない。じっさい、カーカーが轢死すると、ドンビー商会はまたたく間に倒産し、ドンビーの屋敷は売りに出されるのである。つまりドンビーとカーカーの主従関係が示しているのは、新旧の力の対立とその密かな逆転、そしてその背後にひそむ女性の力なのだ。

同様の新旧の対立と主従の力関係の逆転とは、ドンビーの友人で退役軍人のバグストック少佐 (Major Bagstock) と、ネイティブ (Native) と称される彼の使用人との「主人」と「奴隷」の関係にもみられる。ドンビーとバグストックの出会いは、ブライトンにはじまる。ドンビーの息子ポール (Paul) の通う学校には、バグストックの旧友であるベンガルのビル (Bill Bitherstone) の息子が在籍しており、英国での生活に馴染めない息子を心配した親からの依頼でブライトンに出かけたバグストックは、ドンビーと近づきになる。ここで重要なのは、彼らをつなぐものとして、インドが示唆されることだ。

東インド会社は、1765年にベンガルの徴税権を獲得して以来、特権的貿易会

社から領土支配の機構へと姿を変え、みずからの軍隊を維持するまでになった。会社による侵略を阻止しようと立ちあがったムガール帝国の王子たち (Princes) は1819年に制圧され、個々の社員 (商人) や軍人は、しばしば膨大な富をえて帰国した (木幡 100)。⁸

こうした背景を踏まえて、バグストック少佐とネイティブの関係を見るならば、故国に帰れば Prince であり、‘exile’ (310) だと紹介されるネイティブは、ムガールの王子を思わせるだろう。そして、ベンガルに親しい友人を持つ軍人バグストックには、当時ベンガルを支配していた帝国のイメージが重ねられていると考えることもできるだろう。

Suvendrini Perera は、バグストックとネイティブの関係をイギリスと植民地との不当な力関係の隠喩と見て、ネイティブはバグストックが植民地から持ち帰った戦利品だと言う (Perera 59-77)。⁹ とすれば、バグストックの肥満した顔や体は、搾取によって肥太ったイギリス人の強欲を示すと読める。

1725年にジョージ一世が制定したバス上級勲章士のバグストックは、軍人としてジョージ王朝の父権的な旧体制を思わせる人物でもある。ここでディケンズは、旧体制を体現する彼を帝国主義的な圧政と重ねながら、さらに、その彼が、すでにネイティブがいなければ自分で衣服を着て、ボタンを掛けることすら出来なくなっていることを示唆するのである。

[...] the Native got him [Bagstock] into his great-coat with immense difficulty, and buttoned him up until his face looked staring and gasping, over the top of that garment, as if he were in a barrel. The Native then handed him separately, and with a decent interval between each supply, his wash leather gloves, his thick stick, and his hat (306-07).

これは、当時の英国が実は植民地に支えられていることへの作家の皮肉だろう。カーカーがドンビーの男性としての威厳を支えるなら、バグストックにとってのネイティブは、帝國的な権力を誇示するために不可欠な存在である。しかし、皮肉にも、ドンビーとカーカーの場合と同様に、そうした主従関係自体が、絶対的と見えた主人の無力さを露呈する働きをするのである。¹⁰

興味深いことに、ディケンズは、同質の力関係の逆転を、古代エジプトの女王クレオパトラの異名を持つスキュートン夫人とその娘イーディスの関係にお

8 ムガール帝国の王子たちについては、Hibbert 17-19に詳しい。

9 The Great Exhibition に出品された品々や *Punch* に掲載された詩 ‘The Last Night in the Crystal Palace’ などから、インドは女性に例えられることが多く、Moore 99-110に詳しい。

いても、否定的に浮き彫りにしている。ドンビーと同様に、娘を金銭と引き換え可能な商品と見る母親のもとで、商業世界の不自然な価値観を押し付けられて育てられたイーディスは、そんな母に内心反抗しながら生きてきた。イーディスの ‘What childhood did you ever leave to me? I was a woman--artful, designing, mercenary, laying snares for men--before I knew myself, or you’ (432) と母を責める言葉は、母親が体現する古い体質を蔑む彼女の意識を明らかに伝えている。皮肉にも、娘の最初の結婚で遺産が手に入らなかったことからスキュートン夫人は、娘をドンビーの後妻に急いで嫁がせる。つまりイーディスは母の所有物でしかなく、結婚という法的な形をとってはいるものの、母の生活は娘を売ったおかげで安泰となる。注意したいのが、このイーディスの ‘mercenary marriage’ を仲介し、後押しするのがバグストックであることだ。イーディスとスキュートン夫人の母娘の関係では、常に ‘duty’ (472-73)¹⁰ という血縁の絆が強調されている。しかし、じつは彼女たちの関係は、親子の愛情とはほど遠く、むしろバグストックとネイティブの関係にも相当する、いわゆる搾取につながるものと考えられる。つまり、スキュートン夫人とバグストックとを重ね合わせることで、ディケンズは、帝国とジェンダーの結びつきを示していると考えられるだろう。そして同時に、ドンビーとカーカーの場合と同様に、ここでもディケンズは、新旧の対立の根底に女性の問題を据えていることになる。

奇しくもこれらの主従関係は、社会によって保証されたものであり、支配側のドンビーとバグストック少佐はそれぞれ英国の商人、軍人として、帝国の主軸を構成するメンバーである。そんな彼らの「脆弱」ともいえる姿を、若い世代と対比させて浮き彫りにし、その背後に女性の存在を示唆することこそ、作家の思惑ではなかったか。つまりこれらの主従関係と、その思いがけない転倒

10 この関係は、じっさい、後に起こる1857年のセポイの反乱に至る過程に見ることができる。東インド会社は、1765年にベンガル地方の地稅徴収權を獲得して以来、インドの統治・行政機関としての地位を確立してゆき、1813年にはインド貿易の独占權を失い1833年には中国貿易を含むいっさいの貿易活動から手をひいて、完全なインドの統治機関となった。しかし、その兵力の殆どは、地元セポイ人から成るもので、(50年代のはじめ、20万以上の兵力の内イギリス人は3万人ほど) イギリスは、この軍隊をもちいてインド内外にその領土を拡大し、中国とのアヘン戦争においてもこの軍隊の一部を動員し、しかもその費用をインド人の税金で賄っていた。イギリス人将校は、セポイ人たちを ‘tender as a woman’ (Hibbert 49) と見なしていたのだが、1857年セポイ人たちによるインド大反乱(セポイの反乱)が起こる。

11 たとえば、Jennie Batchelor 編集の *The Histories of Some of the Penitents in the Magdalen-House* (1760) では、この ‘duty’ の絆は、明らかに搾取として描かれている。母親が娘 Fanny に言う ‘I desire you will learn to respect your mother more: your duty is to believe everything I say, and do everything I bid you, or I shall disclaim you for my child: I will harbour no undutiful children.’ (102) は、売春をも促すことが仄めかされ、Fanny は売春宿で働くことになる。同様に、*Dombey and Son* でも、極貧の売春婦として登場する Alice Marwood も貪欲な母親によって売春婦へと身をおとすことになる。

によって、ディケンズは、未だ旧体制に縛られた国の衰退を暗示しようとしたことになる。

しかし、ディケンズは単純に旧体制のみを批判して、新旧の交代を是としているわけではない。何故なら旧体制の支配下に置かれ、時にその権力を覆そうとする不気味な力を蓄えたカーカーは轢死、ネイティブは外国人で結局イギリス国内では何の役割も果たさず、ドンビーに反逆したイーディスも国外に逃れるからだ。さらに注目すべきは、ドンビー商会に隣接するシティの界隈で、長年船具商を営み、甥のウォルター (Walter Gay) を育ててきたソル (Solomon Gills) や彼の友人カトル船長の存在である。彼らは、一見ドンビーやバグストックとは対照的にみえる。たとえば、娘のフローレンスが行方不明になろうと、気にもかけないドンビーとは異なり、ソルは海難事故に見舞われた甥のウォルターを追って一人探しに向かう。カトル船長も、友人たちに降りかかった災難は、いつも我が身に重ね合わせて助けを惜しまないし、教育のない貧民の子どもには毎晩本を読んでやるなど、温もりと優しさを備えている。しかし、‘I am an old-fashioned man in an old-fashioned shop, in a street that is not the same as I remember it. I have fallen behind the time, and am too old to catch it again.’ (53) というソルやカトル船長もまた、旧体制に属する人物で、じつはドンビーやバグストックが善と化した人物たちと考えることもできる。つまり、ディケンズは古い体質に警鐘を鳴らしながらも、古い時代の価値観を完全に否定するのではなく、その肯定的な側面をも同時に提示していることになる。むしろ、彼が強調しようとしたのは、新旧の世代交代というよりは、新旧の相互関係の重要さなのではないか。

先にウラニア慈善において、旧弊なクーツとは対照的な進取の思想をディケンズが体現することを示した。しかし、その一方で Peter Ackroyd が、作家に内在する熱意や画期的な社会改革への意気込みから、ディケンズを ‘a pre-Victorian’ (Ackroyd 1080) と定義したように、彼の中にはドンビーに通じる旧世代的な要素もふんだんに見出される。つまり、対立する価値観を二つながらに備えた存在がディケンズであって、この作品には、彼の内部における両者の葛藤とその融合の在り方が示唆されているのだ。

3. 女性の力

こうしたディケンズの内的な葛藤と融合は、男女の立場の逆転が生じたウラニア慈善をめぐるクーツとディケンズの関係にも見ることができる。*Dombey and Son* に描かれた様々な新旧の対立の背後に「女性」の問題が示唆されているのは、クーツとの関係が作家の意識に生み出したジェンダーの問題の重要性

を明らかにする。ウラニア創設の計画において、二人の根本的な対立の根源にあったのは、売春婦たちが何を信じて生きることへの活力とするのか、であった。そして、現世的な救済が必要と考えるディケンズに対し、クーツは「信仰」という観念的なものを中心に据えた。独立独行のセルフメイドマンであるディケンズは、労働を聖と信じ、それによって現実的な報いを得てきた。それゆえ、彼は、ウラニアの運営に際して、職業教育に重きを置いた。しかし、病気を癒し治すイエスの「奇蹟」を信じる熱心な福音主義のクーツは、モラル教育を重視した。慈善を現実的なものにしようとするディケンズと、自身の信条を重視するクーツが、対照をなしていたのである。¹² しかし、こうした決定的な意見の対立を見ながらも、最終的に、クーツが固執する宗教教育や因習的な考えをディケンズは受容し、またディケンズの拘る職業訓練をクーツは受け入れ、そのことによって、ウラニアは従来の売春婦保護施設にはない要素を持つに至った。¹³ 対立を経て両者の融和から生まれた彼らのウラニア Home のように、*Dombey and Son* に描かれる主従関係が表すメッセージはシンプルだ。和解と調和がなければどちらも生き残れない。社会は停滞してしまうのである。

ディケンズにとって、社会は葛藤と変容を繰り返す世界なのだろう。*Dombey and Son* に繰り返しあらわれる「波」、あるいは「水」の背景描写は、社会が本来持つ流動性を象徴してもいる。そして、時代の大きな変容を表すものとして際立っているのが、活発で賢い女性たちの存在だ。ドンビーの権威に真っ向から対抗しようとするイーディスの他にも、たとえば、メイドのスーザン (Susan Nipper) は、主人ドンビーに身分や性差を超えて率直に意見を述べ、乳母のポーリーは、赤子のポールがフローレンスと触れあうことの大切さを主人ドンビーに訴えた。興味深いことに、彼女たちはそれぞれの夫から敬われてもいる。この点で、ディケンズは、男性の支配を覆す女性の力のあることを、この小説において示唆しているように思われる。しかし、このような女性の力が、家庭内に収まらず社会に台頭してくることはあるのだろうか。

じつは、クーツを中心として、現実の社会で、すでにその可能性を示唆するような出来事が起こっていたのである。

After the solicitor had finished reading the will, there was silence from the seven men in the room. It was broken by the Duke, who nervously expressed

12 Kathryn Gleadle は、ディケンズの 'Unitarian' 的アプローチとクーツの 'Evangelical' 的アプローチの違いが、両者の立場の対立を生んだと論じている (132)。

13 ウラニア創設におけるクーツとディケンズとの意見の対立と融合の詳細については、稿を改めて論じる。

his gratitude to his late wife for what she had left him (in a codicil, as it happened) adding: 'I hope none of the family grudge it me, and that we shall all live in harmony.'

It was Lord Dudley who replied: 'I see no reason to the contrary.'

There was nothing more to be said. They all bowed and left the room (Orton 46).

1837年8月10日クーツの祖母 *Duchess of St Albans* の遺書が読み上げられたときの様子である。長子相続制が当然の社会にあって、23歳の若い女相続人の誕生に、驚きや戸惑いが交差していただろう。筆頭相続人となったクーツはもちろん同席すらしていなかった。

イギリスは1837年の遺言法 (*Wills Act of 1837*) の制定により世襲財産制度が廃止され、遺言により娘にも財産を遺すことが可能になった。参政権がない女性にとって、財力は、それに匹敵する力強い糧であり、女王の即位も相俟って、社会における女性の台頭を後押しすることになる。こうした時代を背景として書かれたドンビー家の跡取りをめぐる物語には、まさにクーツとの交わりを通して彼が目当たりにした、女性の社会的地位をめぐるディケンズの見解が託されていると考えられる。そして、そのディケンズの考えを反映するのが、スーザンやポリーのような賢い下層労働者に加えて、ドンビーの家父長的な価値観に真っ向から対立し、最終的にその崩壊をもたらすイーディス、そして何より、一見従順な「家庭の天使」と見えるドンビーの娘フローレンスである。

ドンビーの姉ルーイーザは、フローレンスが家督を相続するなど千年経っても有り得ないと断言する (63)。じっさいフローレンスの存在は、ドンビー商会の傍で長年船具商を営むソルでさえ、甥のウォルターが商会の様子を語るまで知らなかったほどである。そこに古い時代の男性中心の価値観を見ることができる。ウォーリック城にドンビーやバグストックなどが集う場面は、この男子中心の跡取り制度に対する作家の痛烈な風刺となっている。なぜなら、財産目当てに娘をドンビーの後妻に据えるスキュートン夫人は、ここでヘンリー八世を褒め上げるが、そのヘンリー八世はチューダ家の統治を安定させるために血族に拘り、男子の世継ぎを授かるために次々と妻を迫害、処刑へと追い込んだ絶対君主だからである。

もっとも争いを避けるために血族の男子後継者に拘ったヘンリー八世とは異なり、男系の財産相続へのドンビーのこだわりはその理由がはっきりしていない。女性は駄目だ、嫌いだといった側面ばかりが目立つ。たとえば、息子を亡くし、傷心旅行へ旅立ったドンビーは、後にした屋敷や娘フローレンスのこと

を思い出す。

She had been unwelcome to him from the first [...]. Her loving and innocent face rising before him, and had no softening or winning influence. He rejected the angel. Her patience, goodness, youth, devotion, love, were as so many atoms in the ashes upon which he set his heel (313).

ここに並べられたフローレンスの属性は、当時の典型的な女性像に通じる。それを拒絶し、踏みにじるドンビーの姿は、バグストックがネイティブを容赦なく虐めている姿に重なるだろう。このドンビーの女性嫌悪は、ドンビーとカーカーとの関係にもひそかに表されている。すでに述べたようにカーカーは男性でありながら女性的な要素を備えた人物である。跡取りのポールが亡くなると、彼は先ず娘フローレンスに忍び寄り、ドンビー家の婿となる機会をうかがう。ところが、ドンビーはハンサム (handsome)、あるいは傲慢な (haughty) と形容される男性的なイーディスと再婚し、カーカーの企みは崩れ去る。ドンビーはカーカーに深い信頼を寄せていたはずだが、商会の跡取りにカーカーを迎えるつもりなど毛頭なく、むしろ男性でありながら女性的な彼とは対照的に、女性でありながら男性的な要素を備えたイーディスを妻に迎える。そこに、彼の秘かな女性嫌いが示唆されている。

女性を排除しようとするドンビーには、商会の統治者に対する作家のジェンダー観が反映されているように思われる。英国は1711年に創設の *The South Sea Company*¹⁴ によるいわゆる「南海泡沫事件」を契機として、会社経営についての法律が強化された。以後、イギリス国内では株式会社制はあまり普及せず、企業は二、三人、多くても数人の共同出資者が事業を営むという無限責任の共同事業制が主流となった。¹⁵ この無限責任制では、国からの援助は一切見込めない。よって、ドンビー商会が前代未聞の倒産に見舞われたときも資本家で経営者のドンビーがその責務を一人で負うのである。Leonore Davidoffは、18世紀から19世紀にかけての会社の在り方を ‘*The personality of the entrepreneur, or partners, was the firm*’ (200) と言い表すが、それは、真摯な態度が経営者に要求されることを的確にあらわしたものだ。これだけの大きな責任を会社の責任者が担うということを踏まえると、男系の跡継ぎへのドンビーのこだわりは単なる女嫌いではなく、重責を女性がどこまで背負えるのかという

14 この会社は前作品 *Martin Chuzzlewit* (1843-44) で *Anglo-Bengalee Disinterested Loan and Life Insurance Co.* として登場している。

15 村岡 135-36に詳しい。

疑問を率直に示すものかもしれない。

しかも、伝統的に女性は男性の所有物であるという意識があり、これを解決しない限り女性の台頭など所詮無理である。April London はこうした女性観の源を、次のように説明する。

Women's embodiment of customary and more modern understandings of property derives from two sources: on the one hand, the extrinsic signification women carry in their legal status as the property of father and husband and, on the other, the intrinsic meaning they potentially exercise as possessors of their own persons (6).

興味深いことに、一見極めて男性的な世界を描いたかと思える *Dombey and Son* でのフローレンスの扱いからは、女性を男性の所有物とする概念を何とか遠ざけようとするプロットが見えるのだ。たとえば、父親から無の存在とされる彼女は、じつは我知らずドンビーを絶えず不安にさせ、その存在を揺さぶる人物でもある。また、イーディスのかけおち騒動でドンビーを慰めようとしたフローレンスが暴力を受け屋敷を出て行く場面は、日の出頃の町の賑わいが実にすがすがしく描かれ、彼女の新しい旅立ちを予感させる。加えて彼女が向かった先は、叔母ルイーザのもとではなくウォルターの叔父ソルの船具商店であった。ここは、彼女をドンビー家の後継者とみなすソルたちが、彼女のために乾杯した家だから、彼女を蔑ろにするドンビー一族の影響や価値観から、彼女を解放する意図を、そこに読みとることができる。

またフローレンスは自分の意思でウォルターとの結婚を決意する。彼はドンビー商会で働きですが、商会の方針に抗ったために、すぐに西インド諸島へ左遷される。帝国の植民地へ到着する前に彼の乗っていた船は遭難し、彼は中国の商人に助けられて船荷監督人として中国でのビジネスに携わってゆく。このウォルターの履歴を考えると、彼との結婚は、更なる象徴的な意味を持つように思われる。

1830年代の自由貿易運動の高まりは、1833年の東インド会社の中国貿易独占権の廃止や、1839年の反穀物法同盟の誕生から1846年の穀物法撤廃にいたる大きなうねりとなった。もっとも、この「自由貿易」は、じつは対等のものではなく、政府は必要とあれば武力に訴えて「自由貿易帝国主義」と呼ばれる政策をとり、これが中国との貿易に施行されて、アヘン戦争（1839-42）の火種となったのだ。注意したいのが、イギリスが中国に強制的に押し付けていたのが、インド産アヘンで、イギリス商品ではなかったという点だ。自由貿易が叫ばれ

るなか、実は、自由なはずの対中国輸出は妨げられていた。¹⁶ アヘン戦争の勃発が、中国が広東に到着したアヘンを焼却したことにあることを考えると、ウォルターが中国側の商人に雇われ、中国の港に到着する船荷監督の仕事に従事していたことは、彼を植民地支配の体現者ではなく、あくまでも自由貿易の推進者とする作家の意図を示すと考えられる。

じっさい、彼がフローレンスと結婚後に中国へ旅立ち、英国を留守にする設定には、大英帝国から距離を置こうとする意図が見える。中国へ旅立つ用意は、‘Limited and plain’ (851)と描かれ、結婚式に向かう途中で裕福な界限を通り過ぎる様子は、次のように描かれる。

Riches are uncovering in shops; jewels, gold, and silver flash in the goldsmith's sunny windows; and great houses cast a stately shade upon them as they pass. [...] they go on lovingly together, lost to everything around; thinking of no other riches, and no prouder home, than they have now in one another (870).

彼らは、これらのステータスシンボルとは無縁であることが強調されている。二人は、所有の概念から自由だし、男女が同等の立場にある。この彼らのあり方は、フローレンスの犬が、古代ギリシアの哲学者であり、物質的快楽を求めず、唯一の正しい政府を世界政府、自身を世界市民と称し、女性と子供の権利を主張したディオゲネス (Diogenes) であることにも象徴されている。

このように慣習的な女性から少し発展した女性を、ディケンズはフローレンスに体現させた。典型的な「家庭の天使」と見えるフローレンスに潜む新時代における女性の台頭の気配は、おそらく、ウラニア創設をめぐる女相続人クーツとの葛藤や融合の経験を経て、ディケンズが実感したものだろう。しかし彼は、彼女を屋敷の女相続人とはせず、むしろ、理想の母、妻、娘である、いわゆる「家庭の天使」としての姿を強調した形で物語に幕を降ろす。会社と同様、屋敷の相続人となるには、先祖の築いた財だけではなく、何代にも亘る家系の威厳も引き継がなければならない。その重みを、ディケンズは、彼にとっての女性の理想像である「家庭の天使」に一致させることの難しさをも同時に実感したのだろう。クーツはある意味で、その両方を体現していたようだが、¹⁷ そうした女性がディケンズ小説のヒロインになるのは未だ先のようなのである。

16 モートン 384-389に詳しい。

結び

Dombey & Son は、海上制覇を可能にした海軍軍人、そして時間と労働を支配するブルジョワ商人といった、英国の支配権を掌握してきた者たちが、時代の移り変わりのなかでそれぞれの価値観に固執しつつ生きるさまを浮き彫りにした。頑なで横柄な支配者たちに与えられる裁きは厳しい。ドンビーは破産、ドンビー商会に大きな投資をしていたバグストック少佐も連鎖して大損を被る。同時に、ディケンズはこの小説において新たな時代の幕開けを予感させているが、この正体が一体何であるのかを、はっきりと示してはいない。1832年の Reform Act により貴族の完全な支配は終わり、民主による政体が始まった結果、スケトルズ (Sir Barnet) のような急進派がさらに台頭するのか、鉄道という新たな動力に関わるトゥードルのような労働者が結束していくのか、未だ漠然としているようである。そして、重要なのはこの大きな流れに女性は含まれるのだろうかといった疑問である。*Dombey and Son* の執筆において、ディケンズがドンビーの跡取り息子ポールを死に至らしめる意図を密かに知らせていた相手は、もはや従来の執筆における相談相手のフォースターではなく、クーツであったという (Johnson 91)。この事実は、作家ディケンズが、女性の優位を受け入れ、認めるに至ったのが、ウラニア慈善という現実の社会運動においてだけにとどまらず、作家としての領域にも及んでいたことを、うかがわせる。また、ウラニア慈善をとおして、彼が真の女相続人に見たものは、高い教育性、内に秘めた堅固で安定した自己、そして何よりも女性特有のセクシャリティの不在だったのではないだろうか。とりわけウラニア女性との対比の中で、クーツの姿は女性のセクシャリティを問題視させる姿勢を作家の意識にもたらしめたはずだ。そして、このことは、作家を新たな女性像の創造へと導いてゆくのである。次作 *David Copperfield* において、ディケンズは、いわゆる家庭の天使型女性で主人公の妻となるアグネスを描くと同時に、コケティッシュなドーラや、ウラニアの経験が直接的に反映されたマーサという売春婦と、スティアフォースに誘惑されて駆け落ちの末捨てられる堕ちた女エミリーなど、多様な女性像を描き出すことになる。そして、それに続く *Bleak House* (1852-53) では、母親の墮落の影を背負いながら、自身は家庭の天真的な純潔を保ち、同時に「家政婦」として屋敷と家庭の運営を任される女主人公エステル (Esther

17 クーツの秘書を10年以上の長期にわたり務めていた Charles Churchill Osborne は、彼女について、次のように自身の日記に書き留めている。‘The aristocratic influence of a long line of descent were concentrated in her; grace of person, grace of speech, exquisite daintiness and refinement, a delicate perception of distinctions, perfect ease of manner; the Faculty of winning obedience without effort; and the gift of erecting impassable yet imperceptible barriers against familiarity’ (177). ドンビー家の威光を受け継いでいないフローレンスの造型とは対照的だ。

Summerson) へと発展していくのである。

引用文献

- Acroyd, Peter. *Dickens*. London: Sinclair-Stevenson Ltd., 1990.
- Arnold, Walter. *The Life and Death of the Sublime Society of Beef Steaks*. London: Bradbury Evans, Co., 1871.
- Blackstone, William. 'Chapter 16: The Right of Parent and Child' in *Commentaries on the Laws of England*. Vol. 1. The Eighth Edition. Oxford: Clarendon, 1778.
- Chesterton, Gilbert Keith. *Charles Dickens*. London: Methuen & Co., 1919.
- Davidoff, Leonore and Catherine Hall. *Family Fortunes*. Revised Edition. Oxon: Routledge, 2002.
- Dickens, Charles. *Dombey and Son* [1846-48]. Ed., Andrew Sanders. London: Penguin, 2002.
- Foster, John. *The Life of Charles Dickens*, Vol. 1 (1812-1847). London: Chapman & Hall, 1876.
- Gleadle, Kathryn. *The Early Feminists: Radical Unitarians and the Emergence of the Women's Rights Movement 1831-51*. London: Palgrave Macmillan, 1998.
- Hartley, Jenny. *Charles Dickens and the House of Fallen Women*. London: Methuen, 2008.
- Hibbert, Christopher. *The Great Mutiny India 1857*. Middlesex: Penguin, 1980.
- Janes, Pamela. *Shepherd's Bush .. The Dickens Connection*. London: Malden Print and Copy Centre, 1992.
- Johnson, Edgar. *Letters from Charles Dickens to Angela Burdett-Coutts 1841-1865*. London: Jonathan Cape, 1953.
- London, April. *Women and Property in the Eighteenth-century English Novel*. Cambridge: Cambridge UP, 1999.
- Orton, Diana. *Made of Gold: A Biography of Angela Burdett Coutts*. London: H. Hamilton, 1980.
- Osborne, Charles Churchill. MS 46405A. British Library: Burdett Coutts Papers.
- Perera, Suvendrini. 'Wholesale, Retail, and for Exportation: Empire and the Family Business in *Dombey and Son*' in *Reaches of Empire: The English Novel from Edgeworth to Dickens*. New York: Columbia UP, 1991.
- Plumb, John Harold. 'Chapter V: George IV, Regent and King' in *The First Four Georges*. London: B. T. Batsford, 1956.
- Pope, Norris. *Dickens and Charity*. New York: Columbia UP, 1978.

Slater, Michael. *Dickens and Women*. London: Dent, 1983.

Takei, Akiko. 'Dickens and Charity: An Evaluation of Urania Cottage'. 『ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報』第30号（2007年10月）183-200.

The Histories of Some of the Penitents in the Magdalen House. Eds. Jennie Barchelor and Megan Hiatt. London: Pickering and Chatto, 2007.

Winnifrith, Tom. *Fallen Women in the Nineteenth-century Novel*. London: Palgrave Macmillan, 1993.

アーサー・モートン『イングランド人民の歴史』鈴木亮、荒川邦彦、浜林正夫訳、未来社、1972年。

カール・マルクス、フリードリッヒ・エンゲルス『共産党宣言』大内兵衛、向坂逸郎訳、岩波書店、1971年。

ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝（中）』加来彰俊訳、岩波書店、1984年 127-178頁。

『イギリス史3 —近視代—』村岡健次、木畑洋一編、山川出版社、1990-1991年。

『大英帝国と帝国意識：支配の深層を探る』木畑洋一編、ミネルヴァ書房、1998年。